

# 岡崎嘉平太記念館だより



Vol.15



上の写真は、  
岡崎嘉平太氏と  
ゆみ氏。

ピアニスト。嘉平太氏の初孫として東京に生まれる。東京藝術大学卒業、同大学院修了、ピアノ専攻。一九八三年にハンガリー給費留学生に最優秀で合格しハンガリー国立リスト音楽院に留学。一九八六年には朝日新聞主催第六回「新人音楽コンクール」ピアノ部門で優勝。文部大臣賞受賞。全国でソロリサイタルに加えて、東京フィルハーモニー等と共演した。二〇〇四年から始めた「ファミリー&プレマクラシックコンサート」は未就学児と妊婦に向けたユニークなコンサートも積極的に行っておられる。



岡崎ゆみ氏

嘉平太氏のお孫様

嘉平太氏が出会った人々

私共の初孫岡崎由美は、生後六ヶ月くらいでパパの任地香港に移り住み、小学校に上がる前に帰国致しました。小さい頃から背も高く、美人のママに似て、将来が楽しみな可愛い子でした。

小学校ではNHKの東京放送児童合唱団に入り、九重由美子と（里の秋）を歌ったのが、由美の最初の公演だったかと思えます。歌の道に進むかピアノにするか、迷ったこともあったそうです。さてピアノをやることになってからは、指に怪我をしたら大変と、ママはリンゴの皮さえむかせなかつたと聞きました。努力の甲斐あって、難関の芸大ピアノ科にストレートで合格し、その後国費留学生としてハンガリーで勉強し、立派に成功して帰国しました。リンゴの皮さえむかないで育った彼女が、言葉から異なる外国で自炊してのレッスンは、どんなに骨が折れたことかと察せられますが、案に相違して、のびのびと朗らかに、自信をつけて帰ってきて、私もホッと致しました。

今彼女は独自の音楽活動を続けており、リサイタルも皆様のお力添えで盛況を極めているようですが、つんぼの私には由美のピアノが聞こえないことが残念でなりません。しかし彼女は馬好きな私の血を引いて、乗馬を初めて私を喜ばせてくれました。

（中略）多方面にわたり趣味を広げ、ピアノでは成功を収め、後進の指導にも当たる栄えある社会人になってくれて、私は由美に関しても婆婆馬鹿です。

岡崎時子氏（嘉平太氏夫人）著「ひのえうまのいななき」より

## 就任挨拶

岡崎嘉平太記念館館長 美甘武彦

岡崎嘉平太記念館は、平成13年8月23日に開館し、本年度で開館10周年を迎えることとなりました。その記念となる本年4月、岡崎嘉平太記念館館長に就任いたしました。

実は、私は、就任前までは、岡崎嘉平太先生については全日空の社長をなさっていたというぐらいの認識しかありませんでしたが、就任以来、嘉平太先生のごことは知れば知るほど、数々の業績の偉大さ、お人柄の温かさと崇高さ、亡くられるまでご壮健で活躍されたこと等々、深く感銘を受けております。そして、多くの方々が嘉平太先生を敬愛されている事に驚きました。こうした中で、嘉平太先生の研究や顕彰事業の一端に関わらせていただける幸せと責任を感じています。

前述しましたように本年度で開館10周年を迎えることとなり、これもひとえに、地元吉備中央町の皆様を始め、多くの方々のご支援、ご協力の賜と感謝しております。これを記念して、最終ページに掲載しておりますように「名曲コンサート」と特別展「岡崎嘉平太記念館10年の歩み」の開催を予定しております。大勢の方々がおいでくださいますよう心からお待ちいたしております。

本年から新たな10年を歩むこととなりますが、嘉平太先生が希求されたアジアの平和、日中友好、そして、「信はたていと 愛はよ糸 織り成せ人の世を 美しく」という高い志を一人でも多くの方々に知っていただけるよう記念館職員一同なお一層努めて参りますので、引き続き、ご指導、ご協力をよろしくお願い申し上げます。



## 岡崎嘉平太国際奨学財団奨学生の来訪

2011年5月13日(金)



▲ 左から、三橋事務局員、奥平事務局長、河田前館長、笑顔が素敵なウナさん、日本のアニメにも詳しい林さん、サッカーが好きな朱さん、吉川英治を愛読されているサリムさん、美甘館長。  
続いて左に並ぶ2枚は、ヤマザクラを植樹した時のもの。

岡崎嘉平太氏の遺志を継ぎ、中国をはじめとするアジア諸国の人材の育成を図るため、日本留学を希望する優秀な青年を日本に招き、奨学金給付等の支援を行っておられる(財)岡崎嘉平太国際奨学財団第21期奨学生4名らが来岡されました。

嘉平太氏の母校 大和小学校で、4年生の児童らの歓迎を受けました。とても楽しそうな表情で交流されていました。



また、嘉平太氏が故郷の象徴として愛された大和山(おおわさん)の山頂に、一本のヤマザクラを植樹されました。

植樹は、今回で11回目を数え、地元の方の水やりや草刈りなどのお世話を受け、毎年春には可憐に咲いています。



# 嘉平太が愛したふるさと岡山 心なごむ風景 写真展

嘉平太氏は、故郷岡山の行く末をいつも気にかけておられました。

そこで岡崎嘉平太記念館では、嘉平太氏的心情を偲び、岡山の豊かで美しい自然や文化、人情味あふれる風景を改めてみつめ直し、後世に伝えたいとの願いから「嘉平太が愛したふるさと岡山 心なごむ風景 写真展」を開催しています。



最優秀賞「冬木立」

この度で5回目を数えた募集には、160点の作品が寄せられ、吉備路(総社市)を撮影場所に選ばれた作品が最も多く、60～70歳代の方の応募が顕著でした。応募数は毎回増えており、ご応募くださった皆様に大変感謝をしています。

4月24日(日)に山陽新聞写真営巣部 長瀬正己先生並びに日本画家 森山知己先生、岡崎嘉平太記念館館長 美甘武彦で審査を行いました。

最優秀賞には、大村純孝氏の『冬木立』(上右の写真)他、入賞15点が選ばれました。



優秀賞「春のよろこび」



優秀賞「晩秋の彩色」



審査員特別賞「高原にホルンが響く」

岡崎嘉平太記念館にて、5月20(金)から6月26日(日)まで、続いて岡山天満屋地下タウンアートスペースにて、6月29日(水)から7月4日(月)まで展示しました。



岡山天満屋地下アートスペースの様子

来場者は、作品の水準の高さに感心され、表現方法に関心を持たれたり、自然の色彩や風景の美しさ、人物の表情にじっくりとみいっておられました。

また、岡崎嘉平太氏と親交のあった方や、当記念館にゆかりの方々が多数ご来場くださいました。誠にありがとうございました。

# 遺墨日めくり 岡崎嘉平太の心

嘉平太氏の信念を貫き、豊かな愛に満ちた生き方の一端でもお伝えできたらと願い、氏が遺された多くの文章や遺墨をもとに、日めくりを作成しました。

一部1,000円(消費税込み)にて頒布しています。

ご希望の方は当館にお問い合わせください。



## 岡崎嘉平太記念館は開館10周年を迎えます

これを記念した催しを企画いたしました。ぜひ、お越しください。

### 特別展 岡崎嘉平太記念館10年の歩み

平成23年

9月4日(日)―10月23日(日)

開館以来、様々な企画を通じて、当記念館が行った岡崎嘉平太先生の顕彰活動を振りかえると共に、新たな寄贈品もご紹介します。



## クラシック 信と愛の心を育てる名曲コンサート

9/4(日)

午後1時30分開演  
入場無料



ピアニスト  
岡崎ゆみ



大人から子どもまで楽しめます  
お申し込みは岡崎嘉平太記念館へ

会場：吉備中央町ロマン高原かよう総合会館

オーケストラ  
倉敷管弦楽団



編集・発行：岡崎嘉平太記念館

〒716-1241 加賀郡吉備中央町吉川4860-6 きびプラザ内

TEL 0866-56-9033 FAX 0866-56-9066

ホームページ <http://www.okazaki-kaheita.jp>

Eメール [okmh@okazaki-kaheita.jp](mailto:okmh@okazaki-kaheita.jp)

2011.7



岡崎家のご長男 岡崎彬氏が寄せてくださった随筆をご紹介します

## 北京秋天



台基廠一番地……對外友好協會の門を出て左折するとすぐに長安街、それを渡ると北京飯店、当時の長安街には中央のフェンスがなかった。

荷車が驢馬に引かれてゆっくりと動いていたし、その反面すぎましいばかりの自転車の流れ、そして満員鈴なりのバスの屋根の上には屋根一杯の大きな黒い袋がゆらゆらと揺れていた。ガソリンの代わりに天然ガスが入っているとの事。

1963年10月、当時香港に住んでいた私は、覚書貿易訪中団の末席に加えてもらい、戦後初めての訪中をする事になる。

前夜、人民大会堂で周恩来総理主催の覚書貿易訪中団の歓迎宴が開かれた。宴たけなはにして、周総理の講演が始まった。やや高めの、良く通るお声で、淡々と話しを始められた。

『中日国交の歴史は、史書に書かれているものだけでも二千有余年があり、史書に書かれていない時代に遡れば、おそらく四千年、或は五千年にも達するものと考えられます。そしてこの両国の国交は総じて大変良好でありました。』

しかしながら、近年の日中関係は、日清戦争を端緒として戦争状態が継続し、決して良好とはいえないのです。

しかし、その期間は僅かに75年間であり、五千年の歴史の中ではほんの瞬間に過ぎません。この隣国同志の長期にわたる友好関係は、世界の隣国国交史の中では極めてユニークなものと言えます。総じて何処の国でも隣国同志は、仲の悪い事が普通であります。

欧州、中東、アジア、アフリカ等いずれの地方でも、隣国同志の国交は、争いと侵略の繰り返しであります。その主たる理由は、民族の違い、言語の違い、宗教の違い、文化の違い、資源の偏在と君主の征服欲等様々であります。

しかし中国と日本が争ったという記録は近年の75年のみなのです。という事は我々中国人と日本人は本来仲の良い隣国関係で結ばれていると云う事です。

一方世界におけるアジアの地位は、まだ低いという残念な事実が有ります。欧米の列強諸国に比べ、アジア諸国は欧米の植民主義から解放されたばかりで、国力でも、庶民の生活レベルでも、格段と低いのが現実です。しかしその中で、日本一国のみがアジアの国として気を吐いています。私達はまだまだ日本より遥かに遅れた国ではありますが、一生懸命に頑張っています。

そしていつか日本に追いつき、肩を並べてアジアの発展の為に努力しましょう。

アジアにおける平和の確立は、人類究極の目的である世界の恒久的平和に大きく資する事になります。 私たちの老朋友国日本…待っていて下さい！』

鳥肌が立つような興奮が体の中を走った。

我々アジア人のこれから進むべき道が明確に示された。

戦後18年、オリンピックを招致してやっと列国に仲間入りをした日本だったが、未だ戦争の傷跡をどこかに引きずっているような状態だった。しかしその日本のレベルから見ても中国の現状はひどいものだったが、その現実に豪もこだわる事なく、堂々とアジアの未来を説き、世界平和を目指している総理の姿は、さすが十億人（当時、中国の人口は十億人といわれていた。）の中から選ばれた人の偉大さそのものであり、その大きな黒く、優しい眼は、北京秋天の紺碧の空を通して遥か未来の世界へ注がれていた。

『人民広場にはもう行かれましたか？』 流暢な日本語でSさんが尋ねる。

Sさんは北京外交学会の人、戦争中東京帝大に留学していたが、空襲が烈しくなり、上海におられるご両親から『一刻も早く帰国せよ』との矢のような催促。 大学も殆んど授業がなくなり、勤労働員で工場通いの毎日となっていたので、終戦の2か月前の6月に帰国されたとの事であった。

『いいえ、まだ行っていません』と答えた時には、二人の足は天安門に向かって歩き出していた。

当時毛沢東主席は未だ御存命で、毛沢東記念館は建てられていなかった。

したがって天安門を背にして南を向けば、西側の人民大会堂、東側の歴史博物館と革命博物館に囲まれた恐ろしく広い人民広場が有り、その南端に前門が見えた。

北京秋天……息を飲むほどの美しい紺青の空は、東西南北全ての方向に限りなく広がっている。

戦前小学校の時、父親に連れられて北京を訪れた時、宿泊していた北京飯店の窓から見た光景は、遥かに狭い道一杯に夥しい数の洋車（黄包車）の群れと、真ん中を走っている路面電車と膨大な人の動きであったが、今はその道が何十倍も広げられ、道から広場に発展していた。

昔あった人の群れは自転車の流れに変わり、広場の両側を激流のように走っていた。対照的に広場の人の数は三々五々で、凧を揚げている人もいた。そこには、まばらな人達の静と自転車の奔流という動が共存している不思議な環境があった。

『東京の空は今でも綺麗ですか?』

Sさんが突然たずねる。『え??』と咄嗟の答えに窮する。

急速な工業化と自動車の普及で大気汚染が問題視され始めていた日本……返事に窮している私に構わず、Sさんは続けた。

『きれいでしたねえ……。東京の空は……。帰国の日、朝は早起きして湯島の聖堂へ行きました。見渡す限りの焼け野原でしたが、西の方に富士山が輝いていました。美しい紺碧の空には飛行機雲が数条走っているだけでした。』

《国破れて山河あり》 杜甫の詩を思い出しました。『知っていますね。』私の答えを待たず、Sさんは続けた。

『日本が中国を侵略しているので、中国人は皆日本が嫌いでした。』

中国人が集まると、何処で空襲が有り、何人死んだとか、何軒焼けたとか嬉しそうに話しをするのが常でした。又日本の兵隊が中国のどこかで何か非道な事をしたという話を憤慨して語る事もありました。私も中国人ですからそんな話を聞くと腹の立つ事も数多く有りました。しかしそんな時は必ずと云ってもいい程私が住んでいる下宿の事を思い出してしまうのです。』

『お爺ちゃんはお好きな碁の相手として、私を本当の孫の様に可愛がってくれました。私は外国人なので勤労働員からは除外され、家にいる事が多かったのです。お婆ちゃんも家庭菜園作りの助手として、またまた大変大事にしてくれました。収穫した野菜はいつも一番に私の為に料理してくれました。ご主人は出征して南方戦線に行っているとの事。』

おかみさんは家の事も大変でしたが、防空警護団や町内会の仕事がいそがしく、「すまないね」といいながら色々な仕事を私に言い付けました。

お嬢さんが二人いましたが、郊外の軍需工場の寮に泊まっていて時々帰ってきました。

東京は毎晩のように空襲がありましたが、私の住んでいる本郷の一角は幸いにも焼け残っていました。社会全体はほぼ混乱状態と言っても良い程でしたが、私の町はまるで戦争とは縁のないような静けさを保ち、整然としていました。空襲警報のサイレンと爆撃の爆音を除けば、《何処で戦争が起こっているのか?》と錯覚するほどの別世界でした。

毎朝の家の前の掃除、皆だいたい同じ時間に掃除をはじめます。

「お早う!」とにっこり笑って交わす朝の挨拶。



打ち水、朝顔の花に光る小さな水玉、夕涼み、縁台、うちね、蚊取り線香、線香花火。

如何に空襲が激しくてもこう云った昔からの伝統は失われていませんでした。

私にとって一番大切に忘れられないのは、小さな挨拶の言葉です。

「行って来ます!」、「行ってらっしゃあい!」、「ただいまあ!」、「お帰りなさい!」  
と言う子供達の声はみんな疎開してしまったので聞こえなくなってしまいましたが、  
それでも大人達は静かな声で同じ挨拶を繰り返していました。

この会話は家人の間だけで交わされるのではなく、その町に住んでいる人々共通の挨拶でした。  
日本語学校では勿論これらの言葉を教えます。

ごく普通の挨拶の言葉としてです。私もそう思っていました。

しかし、これらの言葉の持つ特別な意味に気がつくのに2年かかりました。

それは信じあっている人たち同志の挨拶なのです。

それは親兄弟は勿論、隣のおばさんでも良い、酒屋のお兄ちゃんでも良い、薬屋のお姉ちゃんでも良い、  
同じ仲間と自然に認識してしまった仲間同士の挨拶なのです。

仲間でない人にも同じ挨拶をするでしょう。しかし抑揚が違います。

こんな言葉は中国語にはありません。「行ってきまます」を翻訳すれば「我去了」

となりますが、日本語のように人間的な温かい内容を含んではいません。英語にも、ロシア語にも、  
他のいかなる言語にもないでしょう。私はこれに気付いて初めてその町の住人になりました。  
中国人留学生「S」でなく…狭間さんちのお兄ちゃんとして……《こんなに平和で善良な人たちが  
どうして戦争をするのだろうか?》 私にとっては理解できない疑問でした。』

広場の真ん中のベンチに座っていると、時々子供がやってくる。外国人が珍しいのか少し離れて  
まじまじと見つめる。

背広をきているから外国人とわかるのだろう。当時、中国人は皆工人服か中山服だったから。

『夕べの周総理のお話は素晴らしかった。私の長い間願っていた事……日本と仲良くなって  
欲しい。……それが一気にかなえられた気持ちです。いつか国交も正常化するでしょう。  
そしたら私もあの美しい町に帰る事があるかもしれません。』

Sさんは《行く》と云わず《帰る》といました。

遠くを眺めて淡々と語るSさん。北京秋天……息を飲むほどの美しい紺青の空は、  
東西南北全ての方向に限りなく広がっていた。

そしてベンチに座っている二人の影が少し長くなってきた。

Sさんにはきっと日本に恋人がいたんだろうと思った。……だが、訊かなかった。

【北京秋天】 それは人の心を透明にしてくれる。

